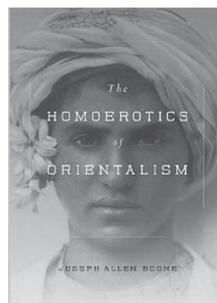


## 書 評

Joseph A. Boone, *The Homoerotics of Orientalism*  
(New York: Columbia University Press, 2014)



志渡岡 理恵

本書は、16 世紀半ばから現在までの約 450 年間に、イギリスやヨーロッパ(後にアメリカ)の主に男の作家、画家、旅行家、思想家が、なぜこれほどまでに中東の男同士の性的な関係を描いてきたのか、西洋の想像力が、なぜ何世紀にもわたってイスラム圏と男同士の性的な関係を結びつけることに執拗にこだわり続けてきたのか、その理由を明らかにしたいという問題意識に基づいた約 500 頁の迫力のある大著である。著者ブーンは、中東の政治・文化が世界で存在感を増し、セクシュアリティをめぐる議論が烈しくなっている現在、この著作を世に問うのは時機を得た意義あることだと思つと、序文で述べている。本書の出版後、ブーンがプリンストン大学やコーネル大学、プエルト・リコ大学、ジェノヴァ大学など 20 を超える世界各国の大学や学会から招かれ、講演していることから、彼の挑戦に対する注目度の高さがうかがえる。

ブーンがこの本を着想したのは 1990 年代であつたらしい。しかし、大学の管理職の仕事で中断を余儀なくされ、再開できる状況になつたときには、テーマが時代遅れに感じられ、もう完成させるエネルギーも残っていないように思われた。当初の計画では、19～20 世紀の西洋の男の作家の作品における中東の同性愛ファンタジーに焦点を絞る予定だったが、ハンティントン・ライブラリーのフェローシップを得、研究を再開すると、興味が再燃し、研究範囲もぐっと広がっていった。ハンティントン・ライブラリーには、19 世紀より前の時代の資料—16 世紀のオスマン帝国やペルシア帝国、アラビア語圏、マグリブへの旅行記や各地の歴史書など—が豊富にそろっていた。これらの資料に目を通していくにつれ、ブーン

は、男同士の性的な関係を描くことは異教徒を誹謗中傷するための政治的プロパガンダ以上の意味をもっていたのではないか、書き手の隠れた願望や恐れを投影する以上の意味をもっていたのではないかと考えるようになる。

ハンテントン・ライブラリーの資料に加え、最近の研究動向もブーンを新たな方向へと向かわせる後押しをした。リサーチ再開後、彼は、W. Andrews、M. Kalpakli、A. Najmabadi、D. Ze'evi らによる研究に多大な刺激を受けた。ペルシア語、アラビア語、オスマン帝国時代のトルコ語、近代トルコ語に精通したこれらの研究者たちは、中東では男同士の性的な関係がどれくらい制度化されていたかに対する理解を劇的に変えていた。中でも、欲望の対象とされる青年の表象に関して、初期近代のヨーロッパとオスマン帝国との類似性を指摘したアンドルーズとカルパキの共著 *The Age of Beloveds: Love and the Beloved in Early-Modern Ottomans and European Culture and Society* (2005) にブーンは最も影響を受けたようだ。いくつもの文化・学問分野を横断する数々の最新の研究書に触発されて、彼の歴史的な洞察は深まり、参照枠はますます拡大していった。

結果として本書の分析の対象となったのは、16世紀半ばから現代までの約450年間に、東洋と西洋の複数の文化・言語圏で書(描)かれた多種多様なジャンルのテキスト—イタリアの旅行記からアラビアのガザル、オスマン帝国の詩、ペルシアの細密画、フランスのポルノグラフィまで—である。ブーンによれば、これらのテキストはすべて何かを物語っており、それぞれの物語がどのように語られているか、なぜ語られているかに目を向ける必要がある。

この作業を行うのにブーンが用いたのはサイドの「対位法的」読解であった。ブーンは東洋と西洋の資料を対位法的に対話させることで、西洋 vs 東洋をはじめとする二項対立から脱し、西洋を中心ではなく他と同じく一地域として位置づけし直すこと(Chakrabaty の言葉を借りれば “provincializing Europe”)を目指した。二項対立に縛られていては、東洋と西洋の双方が持つ異種混交性や矛盾、ズレを理解することはできないとブーンは言う。サイドは *Orientalism* において、西洋と東洋の関係を、力を持つ男 = 西洋が無力な女 = 東洋をレイプするというメタファーで表現

したが、ブーンはサイドによって提示されたこの二項対立の図式を、サイドが提唱した「対位法的」読解により乗り越えることを試みた。

この試みを支えたのは、文学研究者としてブーンがこれまでに積んできたテキストを「精読する」訓練だった。彼は、「精読」を「行間を読むこと」「深く読むこと」と定義する。「行間を読む」とは、創造的であると同時に批判的(分析的)な読みをすることであり、「深く読む」とは、ひとつの物語の共時的・通時的な要素となっている複数の言説に常に注意を払いながら読むことである。「精読」を積み重ねながら最終的にブーンが目指したのは、東洋の男同士への性的関係に対する西洋の受容と幻想、クイア理論、近年盛んになり始めているイスラム圏のセクシュアリティ研究が対話を開始するきっかけをつくることだった。

サイドにより提供された知見を批判的に継承し、関連分野の最新の研究成果をじゅうぶんに意識しながら書かれた本書は、全3部8章から成る。各章のタイトルとそれに続く小見出しはいずれも長く、すっきり整理された構成とは言いがたい。しかし、450年間にも及ぶ長い期間に、ヨーロッパ、アメリカ、北アフリカ、レバント、アラビア半島を含む広大な地域の複数の文化・言語圏において書(描)かれた、多種多様なジャンルの文化的産物—小説、日記、旅行記、エロティカ、民族誌、絵画、写真、映画などを資料として用いているのだから、それは当然なのかもしれない。

第1部「理論と歴史」は2つの章から成る。第1章では初期近代から「長い18世紀」までの旅行記と歴史書が分析され、サイド以降のオリエンタリズムをめぐる議論が検討されている。第2章では、現在までの約400年間に描か／撮られた高官や宦官、男のダンサー、美青年、トルコ風呂などの屋内や屋外で絡み合う男たちの絵画や写真が分析されている。これまで並べて論じられたことのない視覚テキストで埋め尽くされたこの章は、本書の読みどころのひとつだろう。

第2部「欲望の地理学」は3つの章から成る。第3章では Pierre Loti の恋愛物語 *Aziyade* (1876) が丁寧に読み解かれている。この章で注目されているのは、西洋と東洋、ヨーロッパとアジアが出合うイスタンブールという場所。変わって第4章と第5章ではエジプトにスポットライトが当て

られている。第4章では、G. Flaubert、L. Durrell、N. Mailerという3人のヨーロッパの作家が、自らの作家としての評判を確かなものにするために、エジプトをインスピレーションの源としてそれぞれどのように利用したかについて論じられている。第5章では、同様の作業がA. Gideの*Carnets d'Égypte*やY. Chahineのフィルムグラフィを対象になされている。第3部「モードとジャンル」も3つの章から成る。第6章では、20世紀初めの無名・匿名のヨーロッパの実験的な作家たちが、中東の詩の形式を真似て同性愛をテーマにした作品を書き、自分の作品を中東で発見された原稿と偽って売りこんだという興味深い現象がとりあげられている。第

7章と第8章では、視覚テキストへと焦点が移る。第7章では中東の細密画における同性愛のコード分析が試みられ、19世紀のオリエンタリスト絵画における男同士の欲望のありようが考察されている。最終章となる第8章では、ラファエル前派の絵画から20世紀以降の西洋と中東の多彩な視覚文化—モダニストおよびポストモダニストの絵画や写真、ポルノグラフィ、広告、漫画、映画—までが幅広く論じられている、

おびただしい数のテキストが複数の学問領域を横断する視座から分析されている本書は、目次を見取り図として頭に置きながら理路整然と結論まで導かれるのを期待するよりも、むしろ次々と提示される資料に自分の解釈を加えて意味を増殖させていくのを愉しむほうが、より有効活用できるのではないだろうか。序文で強調されているように、ブーンが目指したのは、セクシュアリティをめぐる東洋と西洋の対話を図式化することではなく、その複雑な相互作用の機微を注視することにより見えてきたものを読者に問うことであっただけだから。ブーンテキスト解釈がすべて「妥当な」ものかどうかは、今後本書に触発されて書かれるはずの多くの研究書においてより精緻なかたちで議論されることが期待される。異なる文脈に置けば別の解釈ができる資料もありそうだ。力量のある読み手には、本書は大いなる可能性を秘めた刺激的な一冊となるだろう。